

# 育児意識に関する一考察

## —大学生における意識調査からの検討—

黒谷万美子

### A Study on the Consciousness of Child-rearing Based on Consciousness Research in Female University Students

Mamiko Kurotani

キーワード: 育児不安 child-rearing anxiety, 結婚観 perception of marriage, 育児負担 burden of childcare, 育児環境 environment of child care, 育児支援 child support

#### I. 問題及び目的

近年、ライフサイクルの変化により多様な人生選択が可能であるが、社会的な問題の一つに少子化問題があげられる。わが国の合計特殊出生率は平成 17 年に過去最低の 1.26 を記録し、その後上昇に転じ平成 20 年、21 年の 1.37 と横ばい傾向となり、平成 22 年は 1.39 と前年より 0.02 ポイント上昇している。この原因として厚生労働省は晩婚化の進んだ 30 代後半の団塊ジュニアを中心とした出生数の増加があげられるとしているが、今後更に増加するか否かは女性のライフサイクルに応じた多様な育児支援をいかに行うかにかかっていると言っても過言ではない。古橋<sup>1)</sup>らは経済的支援、精神的・身体的支援等の支援サービスの充実とともにサービス以外の解決策が必要であることを明らかにしている。育児支援サービスの充実だけではなく、個々の自己実現と育児・仕事との両立を含めた包括的支援が必要である。

そこで本研究は将来育児を担うであろう女子大生を対象に、将来の理想の生き方や育児に対する意識を明らかにするとともに、将来の理想の生き方や生活習慣と育児意識との関連性について検討することを目的とする。

#### II. 方法

##### 1. 調査対象

A 大学女子学生 277 名を対象に質問票による自記式アンケートを実施(回収率 97.2%)し、そのうちほとんど記入されていないものを除く有効回答 270 名(有効回答率 94.7%)について分析した。

##### 2. 調査方法

質問票による自記式アンケートを実施し、回収した。倫理的配慮として、調査の目的、データの管理、プライバシーの保護(結果は統計的に処理され個人名が特定できないこと)などを口頭及び書面で説明した。

##### 3. 調査期間

2008 年 6 月～7 月に実施した。

##### 4. 調査内容

調査項目は主として次の項目からなっている。

- ① 対象者の属性に関する項目
- ② 将来の生活に関する項目(家族構成・職業など)
- ③ 育児意識に関する項目(育児不安・育児幸福感など)
- ④ 生活習慣に関する項目(食事・睡眠・運動)

育児意識は坂本ら(2006)<sup>2)</sup>が作成した育児意識尺度と出生率低下の原因尺度を参考にそれぞれ 45 項目と 21 項目を設定し「全く思わない」から「大変思う」までの 5 件法で回答を求めた。生活習慣はプレスローの 7 つの健康習慣尺度(Belloc N.B. and Breslow J., 1972)<sup>3)</sup>を参考に「全然当てはまらない」

から「非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

5. データ集計

統計解析には、SPSS13.0 for Windows を使い、検定は  $\chi^2$  検定、信頼性分析をし、信頼性の認められた尺度は尺度ごとに平均値と標準偏差を求め、t 検定、一元配置分散分析により比較検討した。有意水準は5% (両側検定) とした。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

学年:1年生59名(21.9%)、2年生76名(28.1%)、3年生73名(27.0%)、4年生62名(23.0%)  
 家族構成:三世代以上 114名(42.2%)、核家族155名(57.4%)、その他1名(0.4%)

2. 将来の生活について

(1) 家族形態・子どもの人数

将来、希望する家族形態について最も多かったのは、核家族が59.2%、どちらでもよいが29.6%、三世代以上が11.2%であった。理想の子どもの人数についてみた結果、2人が最も多く62.0%、次に3人が24.4%、1人が4.5%の順であり平均2.26人であった。

(2) 理想の生き方

理想の生き方についてみた結果、図1の通り最も多かったのは就職→結婚または出産退職→育児専念→再就職パターンで47.8%、次に就職→結婚→出産→仕事継続パターンで26.0%、就職→結婚または出産退職→育児専念パターンで16.4%であった。

(3) 母親の生き方

母親の生き方についてみた結果、図1の通り最も多かったのは就職→結婚または出産退職→育児専念→再就職パターンで47.8%、次に就職→結婚→出産→仕事継続パターンで20.0%、就職→結婚または出産退職→育児専念パターンで16.7%であった。

3. 育児意識について

(1) 育児意識

育児意識45項目についてみた結果、図2の通り最も多かった項目は「育児以外の楽しみや趣味を持ちたい」が94.0% (「大変思う」が57.1%、「まあまあ思う」が36.9%)、次に「子どもを持って自分も成長するように思う」が93.7%

(「大変思う」が54.8%、「まあまあ思う」が38.9%)、「自分の生きがいは育児だけではない」が87.4% (「大変思う」が35.7%、「まあまあ思う」が51.7%)であった。逆に最も少なかった項目は、「こどものことを好きになれない気がする」が6.0% (「大変思う」が1.9%、「まあまあ思う」が4.1%)、次に「自分が子どもを受け入れられない気がする」が7.0% (「大変思う」が2.2%、「まあまあ思う」が4.8%)であった。

育児意識45項目に対して主因子法による因子分析を行い、因子負荷量の低かった5項目を削除し再度因子分析を行った結果、表1の通り5因子(累積寄与率40.91%)が得られた。「人生の中で一番重要なのは子どもである」、「子どもさえいれば幸せだ」、「子どもこそ生きがいだ」などに負荷量が高い第1因子を「育児幸福感」と命名した。「育児に自信がない」、「育児ノイローゼになりそうである」、「子育ての全般がわからない」などに対して負荷量の高い第2因子を「育児不安感」とし、「育児は体が疲れると思う」、「育児で自分のやりたいことができない」、「育児はイライラしそうである」などの項目に対して負荷量の高い第3因子を「育児負担感」とした。第4因子は「産休・育休がとりにくいように感じる」、「仕事への支障が不安である」、「社会から孤立しないか不安である」などの項目に負荷量が高かったため、「社会的不安感」とし、「自分の生きがいは育児だけではない」、「育児以外の楽しみや趣味を持ちたい」に負荷量の高かった第5因子を「生きがい追及感」とした。Cronbachの $\alpha$ 係数はそれぞれ第1因子が.63、第2因子が.82、第3因子が.80、第4因子が.80、第5因子が.65であった。

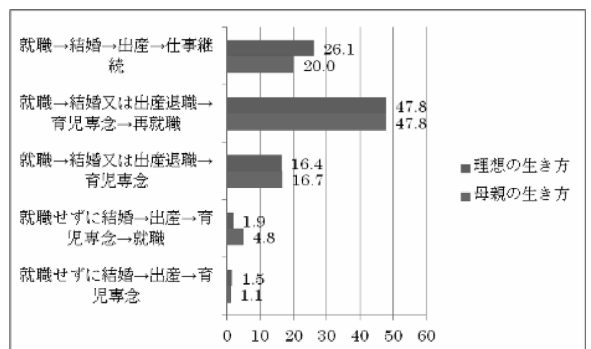


図1. 母親と自分の理想の生き方

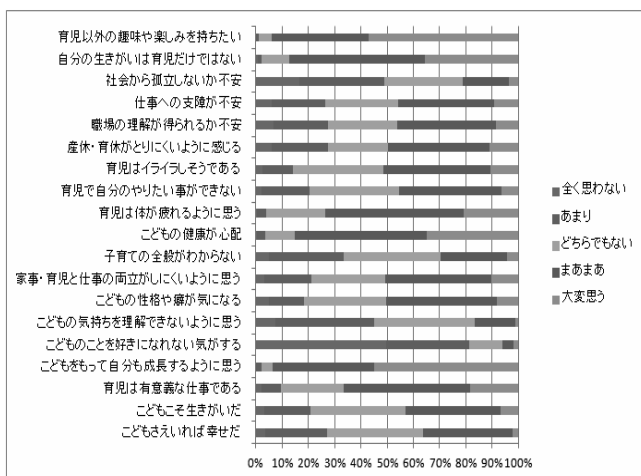


図 2. 育児意識

表 1. 育児意識尺度因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
子供がいとおしい	0.75	-0.06	-0.10	0.04	0.01
子育ては充実感があるように思う	0.69	-0.05	-0.11	-0.14	0.12
子供をもって自分も成長するようになる	0.67	0.11	0.03	0.01	0.09
子供のことを好きになれる気がする	-0.67	0.16	0.28	0.05	-0.04
育児は楽しいと思う	0.67	-0.15	-0.18	-0.06	-0.11
自分が子供を受け入れられない気がする	-0.63	0.14	0.19	0.19	-0.09
子供さえいれば幸せだ	0.59	-0.08	0.14	0.01	-0.58
子供こそ生きがいだ	0.57	-0.09	0.11	0.05	-0.53
人生の中で一番重要なのは子供である	0.52	-0.02	0.01	0.01	-0.32
子供は愛情に素直に反応する	0.49	-0.04	0.00	-0.03	0.07
育児は有意義な仕事である	0.46	0.03	-0.08	0.01	0.01
自分に親としての適性があるのか、自信が無い	-0.12	0.66	0.26	0.05	-0.09
育児に自信が無い	-0.29	0.59	0.33	0.00	0.04
出産費用・教育費・養育費などの負担が気になる	0.03	0.53	0.17	0.34	0.15
育児ノイローゼになりそうである	-0.28	0.53	0.44	0.08	0.00
子供の健康が心配である	0.36	0.47	-0.03	0.08	0.09
子供を安心して遊ばせる場所が無い	0.07	0.40	0.05	0.17	0.04
育児をする際、自分自身の体調や健康に自信が無い	-0.17	0.39	0.14	0.09	-0.12
子育ての全般がわからない	-0.18	0.38	0.12	0.03	0.01
子供の性格や癖が気になる	0.21	0.37	0.19	0.10	0.00
子供の気持ちを理解できないように思う	-0.30	0.37	0.31	0.07	-0.10
子供を通じての近所付き合いや親付き合いを	-0.17	0.37	0.17	0.24	0.07
育児の相談する人がいるかどうか不安に思う	-0.23	0.36	0.14	0.26	-0.09
家事・育児と仕事の両立がしにくいように思う	0.06	0.35	0.32	0.15	-0.04
社会環境や自然環境の悪化、食物の安全性に不安がある	0.08	0.33	-0.17	0.09	0.18
育児で自分のやりたいことができない	-0.10	0.08	0.72	0.19	0.16
自分の関心・時間を子供にとられて視野が狭くなる	-0.06	0.12	0.62	0.18	0.06
子供を育てるために我慢ばかりしなければならぬ	-0.08	0.29	0.54	0.13	0.08
育児はイライラしそうである	-0.18	0.14	0.53	0.02	0.35
育児は毎日同じ事を繰り返しているように思う	-0.23	0.21	0.53	0.08	-0.16
育児は体が疲れるように思う	0.10	0.20	0.48	0.00	0.32
自分ひとりで育児をしなければならぬような	-0.20	0.27	0.44	0.20	-0.16
職場の理解が得られるか不安である	-0.04	0.08	0.09	0.80	0.09
仕事への支障が不安である	0.02	0.16	0.14	0.72	0.06
産休・育休がとりにくいように	-0.06	0.03	0.09	0.71	0.17
配偶者や周囲の理解が得られるか不安である	-0.09	0.25	0.16	0.60	-0.15
社会から孤立しないか不安である	-0.22	0.27	0.21	0.46	-0.17
地域に安心して預けられる保育施設があるか不安である	0.03	0.23	0.02	0.37	-0.03
自分の生きがいは育児だけではない	0.07	-0.01	0.15	0.00	0.42
育児以外の楽しみや趣味を持ちたい	0.21	-0.07	0.18	0.20	0.40
固有値	5.06	3.40	3.30	2.96	1.63
寄与率	12.66	8.51	8.26	7.41	4.07
累積寄与率	12.66	21.17	29.43	36.84	40.91

(2) 出生率低下の原因

出生率低下の原因 21 項目についてみた結果、最も多かった項目は「若いうちは仕事に打ち込みたいという人が増えたから」が 83.7%（「大変思う」が 27.8%、「まあまあ思う」が 55.9%）、次に「結婚しない人が増えたから」が 83.3%（「大変思う」が 31.6%、「まあまあ思う」が 51.7%）、「女性に経済力がついたから」が 81.1%（「大変思う」が 16.7%、「まあまあ思う」が 64.4%）であった。逆に最も少なかった項目は「女性が母性を失ったから」が 5.6%（「大変思う」が 0.7%、「まあまあ思う」が 4.9%）、次に「男性に魅力がなくなったから」が 7.8%（「大変思う」が 0.4%、「まあまあ思う」が 7.4%）であった。

出生率低下の原因 21 項目に対して主因子法による因子分析を行い、因子負荷量の低かった 4 項目を削除し再度因子分析を行った結果、表 2 の通り 4 因子（累積寄与率 36.72%）が得られた。

「女性に経済力がついたから」、「単身生活が便利になったから」、「女性の学歴が高くなっているから」などに負荷量が高い第 1 因子を「育児意識・価値要因」と命名した。「住宅事情が悪いから」、「女性が母性を失ったから」、「幼稚園など施設が不十分だから」などの項目に負荷量の高い第 2 因子を「環境要因」、「育児に対する妻の負担が高いから」、「夫婦二人の生活を充実させたい人が増えたから」、「介護、看護の必要な人がいた場合、育児との両立困難だから」の項目に負荷量の高い第 3 因子を「育児負担要因」とした。「こどもの生活費や教育費に経費がかかるから」、「育児と仕事を両立させる社会的仕組みが整っていないから」の項目に負荷量の高い第 4 因子を「社会的要因」とした。Cronbach の  $\alpha$  係数はそれぞれ第 1 因子が .72、第 2 因子が .71、第 3 因子が .56、第 4 因子が .56 であった。

4. 生活習慣について

健康習慣 8 項目のなかで最も多かったのは、図 2 の通り「喫煙習慣がない」が 85.1%（「非常に当てはまる」が 82.8%、「まあまあ当てはまる」が 2.3%）、次に「過度の飲酒をしない」が 79.4%（「非常に当てはまる」が 61.8%、「まあまあ当てはまる」が 17.6%）、「朝食を毎日と

る」が 69.1%（「非常に当てはまる」が 53.1%、「まあまあ当てはまる」が 16.0%）であった。逆に少なかった項目は「間食をしない」が 12.6%（「非常に当てはまる」が 3.4%、「まあまあ当てはまる」が 9.2%）、次に「定期的に運動をする」が 21.8%（「非常に当てはまる」が 5.0%、「まあまあ当てはまる」が 16.8%）であった。Cronbach の  $\alpha$  係数は .55 であった。

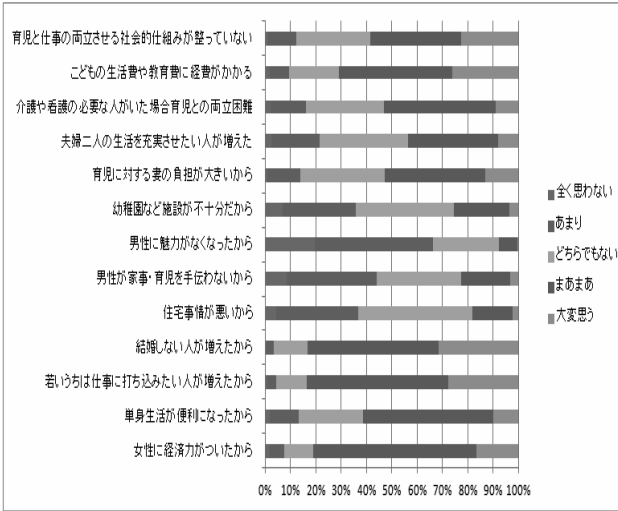


図 3. 出生率低下原因

表 2. 出生率低下原因尺度因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
単身生活が便利になったから	0.63	0.15	0.12	-0.14
女性の学歴が高まっているから	0.55	0.15	0.08	0.00
女性に経済力がついたから	0.53	0.17	0.00	-0.05
若い頃は仕事に打ち込みたいという人が増えたから	0.53	-0.03	0.08	0.23
独身でいることは恥ずかしくないから	0.46	0.00	0.13	-0.04
若い頃から子育てはしたくないという人が増えたから	0.47	0.01	0.14	0.17
子供よりも自分の生活を充実したいと思う人が増えた	0.39	0.00	0.25	0.19
男性が家事・育児を手伝わないから	0.03	0.70	0.16	0.25
子供の教育が母親のせいになるから	-0.01	0.63	0.31	0.10
女性が母性を失ったから	0.12	0.52	-0.02	-0.03
住宅事情が悪いから	0.17	0.44	0.23	0.20
子供の生活費や教育費に経費がかかりすぎるから	0.20	-0.08	0.63	0.29
育児に対する妻の負担が大きすぎるから	0.08	0.27	0.56	0.10
介護や看護の必要な人が家族にいた場合、育児との両立困難	0.19	0.26	0.51	0.03
夫婦二人の生活を充実させたいと考える人が増えた	0.19	0.23	0.32	0.06
育児と仕事を両立させる社会的な仕組みが整っていないから	0.07	0.11	0.36	0.56
幼稚園など施設が不十分だから	-0.02	0.31	0.07	0.55
固有値	2.04	1.73	1.51	0.96
寄与率	11.97	10.18	8.89	5.67
累積寄与率	11.97	22.15	31.05	36.72

5. 諸尺度について

(1) 属性別諸尺度

家族構成別(三世代以上と核家族)諸尺度についてみた結果、健康習慣において差は認められなかったが、育児意識の社会的不安感(P<.01)と出生率低下原因の育児負担要因(P<.01)において差が認められ、社会的不安感では三世代以上、育児負担要因では核家族の方が高値であった。

(2) 理想の生き方と諸尺度

将来の理想の生き方として育児専念型・育児後再就職型・仕事継続育児型・仕事継続非育児型の4パターンに分けて諸尺度をみた結果、育児意識の育児幸福感(P<.01)、社会的不安感(P<.001)、生きがい追求感(P<.01)、出生率低下原因の社会的要因(P<.01)において差が認められた。育児幸福感では再就職型が、社会的不安感では仕事継続非育児型が、生きがい追求感では仕事継続育児型が、社会的要因では仕事継続育児型がそれぞれ高値であった。

(3) 健康習慣と諸尺度

健康習慣8項目をそれぞれ「ある」群と「なし」群の2群に分けて諸尺度とみた結果、「過度な飲酒をしない」と出生率低下原因の育児負担要因(P<.01)において差が認められ、過度な飲酒をする者が高値であった。「喫煙習慣がない」と出生率低下原因の環境要因(P<.001)、育児負担要因(P<.01)において差が認められ、それぞれ喫煙習慣がある者が高値であった。「適正体重を維持する」と育児意識の生きがい追求感(P<.01)において差が認められ、適正体重を維持している者が高値であった。また「定期的に運動する」と出生率低下原因の育児意識価値要因(P<.01)、社会的要因(P<.01)において差が認められ、それぞれ運動するの方が高値であった。更に「朝食を毎日とる」と育児意識の育児幸福感(P<.01)、出生率低下原因の環境要因(P<.01)で差が認められ、食べていない者が高値であった。「間食をしない」と育児意識の育児幸福感(P<.01)において差が認められ、間食をするの方が高値であった。

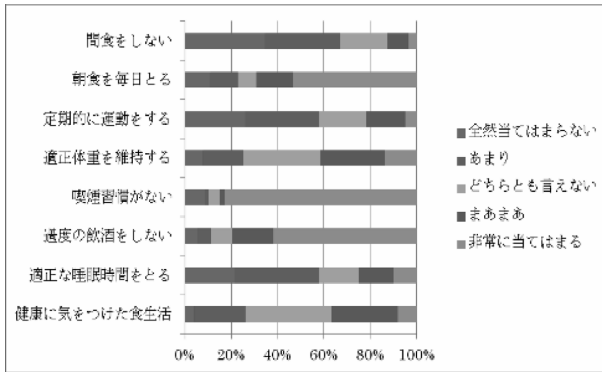


図 4. 生活習慣

表 3. 属性・理想の生き方別諸尺度

	家族構成			理想の生き方			
	三世以上 核家族	育児専念型	育児後再就職型	仕事継続育児型	仕事継続非育児型		
育児幸福感	N	111	149	48	130	67	13
	平均値	3.89	3.84	3.88	3.92	3.84	3.36
	SD	0.52	0.61	0.54	0.52	0.61	0.76
	t値orF値	0.74			4.11**		
育児不安感	N	105	150	45	125	67	14
	平均値	3.24	3.18	3.17	3.23	3.15	3.35
	SD	0.54	0.54	0.54	0.51	0.59	0.54
	t値orF値	0.82			0.67		
育児負担感	N	110	153	45	131	69	14
	平均値	3.19	3.11	3.09	3.17	3.09	3.29
	SD	0.58	0.76	0.51	0.62	0.69	0.54
	t値orF値	1.09			0.6		
社会的不安感	N	113	152	48	130	69	14
	平均値	3.11	2.89	2.68	2.92	3.27	3.32
	SD	0.76	0.80	0.75	0.72	0.84	0.70
	t値orF値	2.31**			6.97***		
生きがい・達成感	N	113	153	48	131	69	14
	平均値	4.36	4.34	4.16	4.38	4.46	4.39
	SD	0.50	0.66	0.58	0.61	0.58	0.49
	t値orF値	0.27			2.66**		
育児意識・価値要因	N	112	154	47	132	69	14
	平均値	3.7	3.71	3.74	3.68	3.76	3.64
	SD	0.53	0.55	0.47	0.55	0.52	0.72
	t値orF値	0.17			0.48		
環境要因	N	113	153	48	131	69	14
	平均値	2.57	2.63	2.64	2.62	2.54	2.51
	SD	0.57	0.69	0.59	0.62	0.70	0.59
	t値orF値	0.77			0.36		
育児負担要因	N	112	153	47	131	70	13
	平均値	3.32	3.49	3.33	3.42	3.48	3.23
	SD	0.72	0.63	0.67	0.65	0.73	0.63
	t値orF値	2.01**			0.79		
社会的要因	N	114	154	48	133	69	14
	平均値	3.77	3.77	3.53	3.73	3.96	3.93
	SD	0.82	0.80	0.81	0.79	0.81	0.76
	t値orF値	0.01			2.97**		
健康習慣	N	112	146	47	126	68	13
	平均値	3.30	3.23	3.23	3.24	3.35	3.13
	SD	0.52	0.63	0.65	0.57	0.59	0.55
	t値orF値	0.83			0.89		

\* PC.05 \*\* PC.01 \*\*\* PC.001

表 4. 健康習慣別諸尺度

	N	適度の飲酒をしない		喫煙習慣がない		適正体重維持		定期的に運動		朝食毎日摂取		間食をしない	
		なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり
育児幸福感	N	30	201	27	215	63	107	147	55	59	174	170	32
	平均値	3.78	3.87	3.79	3.88	3.88	3.88	3.86	3.86	3.99	3.84	3.90	3.66
	SD	0.69	0.56	0.87	0.52	0.65	0.55	0.59	0.60	0.53	0.58	0.58	0.57
	t値	0.77		0.84		0.05		0.07		1.76**		2.13**	
育児不安感	N	29	197	26	211	61	105	145	53	57	174	169	31
	平均値	3.17	3.23	3.20	3.22	3.20	3.21	3.24	3.10	3.15	3.21	3.22	3.21
	SD	0.61	0.53	0.62	0.52	0.58	0.56	0.55	0.56	0.61	0.52	0.54	0.64
	t値	0.6		0.14		0.07		1.61		0.69		0.09	
育児負担感	N	30	203	27	219	65	118	150	55	57	179	173	32
	平均値	3.27	3.14	3.32	3.11	3.22	3.14	3.18	3.08	3.16	3.11	3.15	3.13
	SD	0.66	0.61	0.76	0.59	0.65	0.62	0.64	0.55	0.64	0.61	0.61	0.71
	t値	1.12		1.64		0.88		1.11		0.49		0.19	
社会的不安感	N	28	208	26	221	64	109	150	57	57	181	173	32
	平均値	3.02	3.03	2.93	3.01	2.93	3.07	3.01	2.99	2.97	3.02	2.96	3.04
	SD	0.87	0.79	0.94	0.76	0.83	0.81	0.83	0.79	0.85	0.78	0.80	0.87
	t値	0.01		0.52		1.05		0.19		0.35		0.55	
生きがい・達成感	N	29	206	27	220	66	109	151	56	59	179	173	33
	平均値	4.29	4.38	4.22	4.40	4.30	4.47	4.34	4.38	4.32	4.40	4.36	4.33
	SD	0.54	0.57	0.56	0.52	0.66	0.51	0.59	0.49	0.59	0.55	0.57	0.55
	t値	0.74		1.63		1.90**		0.34		0.89		0.21	
育児意識・価値	N	30	205	27	220	66	107	151	56	60	178	174	32
	平均値	3.69	3.72	3.85	3.71	3.81	3.69	3.66	3.84	3.65	3.72	3.69	3.74
	SD	0.57	0.53	0.63	0.51	0.62	0.53	0.56	0.50	0.62	0.50	0.56	0.50
	t値	0.28		1.28		1.28		2.06**		0.94		0.51	
環境要因	N	30	205	27	220	66	107	150	57	59	179	173	33
	平均値	2.74	2.55	3.04	2.54	2.64	2.55	2.59	2.55	2.72	2.54	2.56	2.61
	SD	0.64	0.63	0.78	0.60	0.68	0.65	0.64	0.64	0.71	0.61	0.62	0.62
	t値	1.54		3.95***		0.88		0.39		1.91**		0.36	
育児負担要因	N	28	206	26	220	66	107	150	55	59	178	173	33
	平均値	3.61	3.37	3.69	3.37	3.32	3.44	3.35	3.51	3.50	3.37	3.40	3.48
	SD	0.65	0.67	0.74	0.66	0.77	0.65	0.70	0.60	0.72	0.66	0.70	0.58
	t値	1.76**		2.33**		1.03		1.48		1.27		0.62	
社会的要因	N	30	207	27	223	65	109	151	57	60	180	175	33
	平均値	3.97	3.75	3.93	3.77	3.83	3.76	3.71	3.97	3.91	3.77	3.81	3.73
	SD	0.82	0.82	0.85	0.80	0.92	0.71	0.82	0.64	0.84	0.79	0.83	0.73
	t値	1.34		0.96		0.60		2.20**		1.18		0.55	

\* PC.05 \*\* PC.01 \*\*\* PC.001

#### IV. 考察

##### 1. 理想の生き方について

理想のこどもの人数についてみた結果、平均 2.26 人と調査当時の合計特殊出生率 1.37 と比較し高値であった。これはこどもを産むことに対する肯定的考えであるとともに、理想の姿として数人とこどもを産み育てたいという理想像を垣間見ることができると考える。

理想の生き方についてみた結果、最も多かったのは育児後再就職型であり、次に仕事継続育児型、育児専念型の順であった。こどもを産んでも仕事がしたいという職業志向が強いものと考えられるが育児後再就職型



が多いことから、仕事を継続しながらの育児に対する何らかの不安要因が推察される。先行研究においてもこどもを保育園に預けることへの抵抗はなくなりつつある<sup>4)</sup>ものの、依然としてM字型就労パターンの労働を希望している<sup>5)</sup>が、今回の結果でも同様にM字型就労パターンが多い結果であった。

母親の職業形態と理想の生き方とほぼ同様の結果が得られたことから、母親の職業形態が娘に何らかの影響を与えたのではないかと推察されるが今回の結果では明らかにできなかったため次回の検討課題とした。

## 2. 育児意識及び出生率低下原因について

育児意識についてみた結果、最も多かった項目は「育児以外の楽しみや趣味を持ちたい」、次に「こどもを持って自分も成長するように思う」、「自分の生きがいは育児だけではない」であった。いずれの項目も自己成長、自己実現したいという意識の表れであると考え、価値観が多様化し多様な選択が可能である<sup>6)</sup>からこそ、自己実現を模索しているのではないだろうか。

出生率低下原因についてみた結果、最も多かった項目は「若いうちは仕事に打ち込みたいという人が増えたから」、次に「結婚しない人が増えたから」、「女性に経済力がついたから」であり、逆に最も少なかった項目は「女性が母性を失ったから」であった。女性の社会進出、未婚化により育児以外の価値が育児の価値より上回ったり、育児によって制限されると考えているものと思われる。さらに母性は失われていないと考えている。世代による母性の変化についての研究<sup>7)</sup>では世代によって母性は失われていないことを明らかにしており、母性意識の発達は成長発達の中で獲得していくとの研究報告<sup>8)9)10)</sup>が多い。今回の結果でもこどもに対しての否定的な感情ではなく、育児に対する否定的な意識が表れたものと考えられる。

## 3. 生活習慣について

健康習慣のなかで最も多かったのは「喫煙習慣がない」が85.1%、「朝食を毎日とる」

が69.1%であった。平成手21年国民健康・栄養調査の結果<sup>11)</sup>をみると、20歳代女性の喫煙率は16.2%、朝食欠食率は14.3%であったがその結果と比較すると朝食欠食率が高値であった。その他「定期的に運動をする」が21.8%、「適性体重を維持する」が41.6%、「適正な睡眠時間7~8時間をとる」が24.9%であったが国民健康・栄養調査の結果は、それぞれ12.4%、68.6%、16.7%であり、定期的運動と適正な睡眠時間が高値であった。学生であるが故に運動や睡眠時間は確保されているものの食事や体重管理という面では、あまり注意が払われていない現状が明らかになった。

## 4. 育児意識と諸尺度について

理想の生き方と諸尺度についてみた結果、育児意識の育児幸福感、社会的不安感、生きがい追求感、出生率低下原因の社会的要因において差が認められた。それぞれ高値であったのは再就職型、仕事継続非育児型、仕事継続育児型、仕事継続育児型であった。再就職型は育児に対する肯定的な思いが強い故に退職するものの育児以外の自己実現の可能性を求め再就職の道を選択するものと推察される。また、仕事継続非育児型は仕事と育児を両立するための施策や支援に不安があることがあることが明らかになった。更に仕事継続育児型は育児以外の楽しみや生きがいをもちたいという思いと共に仕事と育児の両立のための基盤整備が不十分であるという考えが強いことが判明した。平成20年に内閣府が行なったワークライフバランスに関する意識調査<sup>12)</sup>の結果をみると仕事、家庭生活、地域・個人の生活の優先度について、希望とする生活と現実の生活が一致している人は約15%に留まり希望と現実と大きな乖離があるという結果がでている。更に政府による取組みとして、保育所など子育て支援を拡充することが必要と考えている割合は8割近い。制度の充実と言うまでもないが、女性自身の自己実現を踏まえた自立意識や男性女性へのワークライフバランス意識の充実のための教育支援が不可欠である。

「過度な飲酒をしない」と出生率低下原因の育児負担要因が、更に「喫煙習慣がない」と出生率低下原因の環境要因、育児負担要因において差が認められた。「適正体重を維持する」と育児意識の生きがい追求感が、「定期的に運動する」と出生率低下原因の育児意識価値要因、社会的要因において差が認められた。更に「朝食を毎日とる」と育児意識の育児幸福感、出生率低下原因の環境要因で、「間食をしない」と育児意識の育児幸福感において差が認められた。健康習慣と育児意識や出生率低下原因について差が認められたことから、何らかの関連が考えられるが、今回その関連について明らかに出来なかったため次回の検討課題としたい。

- 11)厚生労働省:平成21年国民健康・栄養調査結果
- 12)内閣府:ワークライフバランスに関する意識調査  
<http://www8.cao.go.jp/wlb/research/pdf/wlb-net-svy.pdf>

#### 引用文献

- 1)古橋啓介・秦和彦・細井勇他:田川地域における保育者の子育て意識調査,福岡県立大学紀要,12(2),55-74(2004)
- 2)坂本康子・古橋啓介:女子大学生における理想の生き方と育児観について,福岡県立大学人間社会学部紀要,15(1),119-137(2006)
- 3)Belloc N.B.and Breslow J: **Relationship of physical health status and health practices.**Internal Prev. Med 1:409-421 (1972)
- 4)坂本祐子:子育てのしやすい社会環境に関する基礎的考察,「地域政策研究」高崎経済大学,8(3)(2004)
- 5)国立社会保障・人口問題研究所:結婚と出産に関する全国調査(第12回出生動向基本調査),(2003)
- 6)坂本祐子:ライフコースにおける仕事と子育ての位置づけ,「地域政策研究」高崎経済大学,10(3),77-86(2008)
- 7)小野けい子・斎藤いずみ・黒田優子他:母性意識の世代差の研究,愛媛県立医療技術短期大学紀要,5,21-31(1992)
- 8)斎藤益子・瀬口チホ・本末研一他:未婚女性の母性意識とその形成に影響する要因の検討,第23回日本看護学会収録母性看護,16-19(1992)
- 9)松岡浩子・和田桂子・花沢成一:青年期男女における母性度・父性度の発達に関する要因の検討,母性衛生,41(4),500-505(2000)
- 10)中川英一:「こどもをかわいいと思う」心を育てる要因,母性衛生,40(2),258-265(1999)